

## II 研究開発の内容

### 1. 青年期の「キャリア形成」を中心として

丹下容子・福谷敏  
山田孝・今村敦司  
中村明彦

#### (1) 「キャリア形成」における生徒の実態

##### ①進路指導とキャリア形成

本校は中学校各学年2学級(計240人)、高等学校各学年3学級(計360人)という小規模校である。少人数でありながらそこで学ぶ生徒たちの進路希望は多種多様であり、加えて学力も非常に多様であるため、文系・理系やコース制のクラス編成では個人の進路希望に対応できない。上級学年では多様な生徒に対応できる選択科目が設定されており、生徒たちは各自のニーズに応じて選んだ科目を受講する。したがって、学級そのものは文系・理系のみならずさまざまな進路目標を持った40人の集団になっている。このような集団はもちろん進路指導上メリット・デメリット両面を持っているが、多様な進路を考えているクラスメートたちの姿は生徒各自にとってよい刺激となって働いているように思われる。また、このような集団の進路指導は複雑で手間が掛かり困難な指導となるが、教員にとってもよい経験として蓄積されることになる。

本校における進路指導は6年間通じて実施される総合的学習「総合人間科」に負うところが大きい。特に、中学1年生と高校3年生は「生き方を考える」というテーマの下で、進路観も同時に形成されていく。ここでは、本校の生徒たちがどのような進路観・職業観を持っているかという点について、6年間の集大成である高校3年生のアンケート結果から概観することにする。

平成12年度第1回の総合人間科の時間(4月15日)に、高校3年生114名に対して次のようなアンケートを実施した。

問1 次の生活スタイルの中で、共感できるものがあれば3つまで( )内に1~3の順位をつけて記入して下さい。また「こんな生活は絶対に望まない」というもの

があれば×印(いくつでもよい)を記入して下さい。

- ( ) ①社会のために役立ちたい。
- ( ) ②社会的に偉くなりたい。
- ( ) ③自分のことは考えず、企業の発展のために尽くしたい。
- ( ) ④経済的に豊かな生活をおくりたい。
- ( ) ⑤楽しい生活をしたい。
- ( ) ⑥自分の能力をためす生き方をしたい。
- ( ) ⑦別にこれという目的もなくのんきにやっていきたい。
- ( ) ⑧世の中に背を向けても自分なりに生きたい。

問2 現在のあなたの進路決定、職業選択について何が重要な要因となっていますか。次のうちから当てはまるものに○をつけて下さい。(○はいくつつけてもよい。)また「その他」の欄には具体的に記入して下さい。

- ( ) ①その職業の社会的意義
- ( ) ②その職業の収入の高さ
- ( ) ③自分の能力・学力との関係
- ( ) ④自分の個性・性格との関係
- ( ) ⑤自分の興味・関心との関係
- ( ) ⑥親の意見
- ( ) ⑦身の回りにいる人の影響
- ( ) ⑧テレビや映画の影響
- ( ) ⑨仕事が楽しそう
- ( ) ⑩その他(具体的に )

問3 高校卒業後、「進学」を予定している人はAの問いに、「就職」を予定している人はBの問いに、「働きながら学びたい」

1. 青年期の「キャリア形成」を中心として

と考えている人は両方に答えなさい。

A 「進学」の理由を1つにしぼるとすると何ですか。次のうち当てはまるものがあれば1つ◎をつけなさい。またその他にも2番目以下の理由として当てはまるものがあれば○をつけなさい。

- ( ) ①資格を取得するため
  - ( ) ②就職に有利だから
  - ( ) ③教養や視野を拡大するため
  - ( ) ④専門知識や技術を習得するため
  - ( ) ⑤学生生活や課外活動を楽しむため
  - ( ) ⑥学歴がないと将来困りそうだから
  - ( ) ⑦このまま社会に出るのは不安だから
  - ( ) ⑧その他(具体的に )
- (\* B 「就職」に回答した者はいなかったため、以下省略。)

アンケート集計結果 (数字は人数)

問 1	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
1 位	5	2	1	9	38	17	1	8
2 位	8	1	1	24	20	21	5	4
3 位	15	7	2	28	28	19	8	17
望まない	10	14	54	3	1	0	25	13

問 2

- ① 21
- ② 25
- ③ 36
- ④ 61
- ⑤ 90
- ⑥ 8
- ⑦ 14
- ⑧ 12
- ⑨ 48
- ⑩ 2

問 3

- ◎ ○
- ① 13 25
- ② 5 31
- ③ 16 36
- ④ 27 24
- ⑤ 10 24
- ⑥ 7 17
- ⑦ 8 22

この集計結果から次のようなことがわかる。

1. 生徒たちが共感できる生活スタイルは「楽しく、自分の能力をためすことができ、経済的に豊かな」生活である。一方、絶対に望まないのは「自分のことは考えず、企業の発展のために尽くす」生活であり、「目的もなくのんきにやっっていく」生活も望んでいない。
2. 職業は「自分の興味・関心、個性・性格に合っ

たもので、楽しい」仕事がいい。

3. 進学を希望する第1の理由は「専門知識や技術を習得するため」であり、第2の理由は「教養や視野を拡大するため」である。しかし、◎の数が86、○の数が179であることからわかるように、この時点で「進学」の積極的な理由を1つ挙げるのは難しかったのであろう。生徒たちの正直な気持ちは実は2番目以下の理由に表れているようだ。「就職に有利」「資格がほしい」「学歴がほしい」「学生生活を楽しみたい」「このまま社会に出るのは不安」というのはすべて彼らの本音なのである。

「目的もなくのんきにやっっていく」生活を望ましくないと、「楽しく、自分の能力をためすことができ、経済的に豊かな」生活を望ましく思う彼らが、彼らなりのキャリアを形成していくのに必要なことは何か。それは、「自分」を客観的に見つめ、認識していくことであろう。それ抜きにしては、彼らの望む「自分」らしい生活を手に入れることはできない。その能力を高3までに身につけて次のステップに進むことが求められるが、高3になっても自分の進路を考えられない生徒が少数存在するように、やや心もとないのが現状である。低学年から、総合人間科で一人一人の生徒に直接それを求めていくことは無論だが、教科教育や新教科群で徹底的に基礎基本を指導し、生徒に切磋琢磨させることでその中から「自分」を発見させることが今後の課題であろう。進路目標と自分の現状との距離を客観的に測ることができ、その上でその距離を縮めたいと願う生徒がいてこそ、進路指導上の直接的なサポートやアドバイスが生きるのである。(丹下容子)

②本校の教育課程の特色と問題点

- 骨格として、高校部分が全日制普通科の中高一貫の教育課程をもつ小規模な実験校である。地域の標準的な中学校の生徒が、6年一貫で本校に学び、少人数の学校に多様な学力・進路目標を持った集団で、上級学校へ進学している。今日の社会背景をふまえ、このような生徒にふさわしい教育課程の開発を目指している。編成の方針は、次の通りである。
1. 総合的学習「総合人間科」を引き続き、各学年、学年団の全教官が協力し担当する。これは、総合的な教科であると共にフィールドワークを通じ、「生き方を考える」こと、すなわち、生徒の進路観の涵養もねらいとする。
  2. 心と体の教育「ヒューマンプログラム」を新設

した。(参照P23ソーシャルライフのページ)

3. 中学選択プロジェクト・高校新教科群を新設した。(参照P32選択プロジェクトのページ)

4. 既存の教科の基礎基本を踏まえつつ、基本的な教科の目標を達成する。

基礎基本充実のTTや進路学力の多様化に対応するTTや多展開授業を計画していく。

上記2. 3. については別に述べる。中学において基礎基本を中心とし、また、総合人間科を含め、生徒の活動を重視している。高校では、総合人間科を引き続き学び、生徒の活動の中で、進路観や学習の動機づけとする。普通教科については、低学年の一斉授業ではTTを取り入れ、上級学年では、多様な生徒に対応できる選択科目をもうける。必ずしも、理系・文系の区別ははっきりさせていない。本校は上級学校進学希望者が多数であるが、各教科の学力は非常に多様であり、集団として良い経験になっている。

今後の課題は、「教科活動での基礎基本の重視」である。伝統のある附属学校の教科指導の特徴に、「手作りの基礎基本」を生徒に身につけさせるというものがあつた。教科本来の目的に従った「学・術の基礎作り」をさせたい。この点で、選択プロジェクト・新教科群への期待が大きい。しかし、教科教育の面では、継続性のある基礎基本の科目において、高校低学年の時間不足が予想される。将来の「文化・教養」や「上級学校での基礎」になる文化を磨く附属学校らしい落ち着いた教科本来の取り組みの部分、生徒にどう迫るかが課題である。  
(福谷 敏)

○中学教育課程 (平成13年度実施予定)

		1 年	2 年	3 年
教 科		週当たり時数	週当たり時数	週当たり時数
国 語		4	4	4
社 会		3	3	3
数 学		4	3	4
理 科		3	3	4
音 楽		2	1.5	1
美 術		2	1.5	1
保健体育		3	3	3
技術家庭		2	2	3
英 語		4	3	4
ヒューマンプログラム	道 徳	1	1	1
	特別活動	1	1	1
	学級活動			1
	ソーシャルライフ	1	1	
総合人間科		2	2	1
選択教科	基礎英語		1	
	基礎数学		1	
	選択プロジェクト		1	1
計		32	32	32

選択プロジェクトは、2・3年の異学年小クラスによる展開

1. 青年期の「キャリア形成」を中心として

○平成13（2001）年度入学 中学校教育課程

授業時間	第 1 学 年			第 2 学 年			第 3 学 年		
	年 間 授業時間	週当り 時 数	備 考	年 間 授業時間	週当り 時 数	備 考	年 間 授業時間	週当り 時 数	備 考
国 語	140	4	(書写35)	105	3		140	4	
社 会	105	3		105	3		105	3	
数 学	140	4		105	3		105	3	
理 科	105	3		105	3		105	3	
音 楽	70	2		52.5	1.5		35	1	
美 術	70	2		52.5	1.5		35	1	
保 健 体 育	105	3		70	2		70	2	
技 術 家 庭	70	2		70	2		70	2	
外 国 語 英 語	140	4		105	3		105	3	
ヒューマン プログラム	道 徳	35	1	35	1		35	1	
	特別活動 学級活動	35	1	35	1		35	1	
	ソーシャル ライフ	35	1	専門講師と学年担 任団による授業	35	1	専門講師と学年担 任団による授業	35	1
(総合人間科) 生き方を探るI	70	2	学年担任団による 授業						
(総合人間科) 生命と環境I				70	2	学年担任団による 授業			
(総合人間科) 平和と国際理解I							70	2	学年担任団による 授業
選 択 教 科	基 礎 英 語	中2、 中3で 開講	基 礎 英 語 A・B・C・D	35	1	2クラス4展開 既習内容の復習	35	1	2クラス4展開 既習内容の復習
	基 礎 数 学		35	1	隔週で英語、数学 交互に行なう	35	1	隔週で英語、数学 交互に行なう	
	選 択 プロジェクト		35	1	2・3年の異学年小クラス 生徒の興味、関心のあるテーマによる選択クラス展開	35	1	2・3年の異学年小クラス 生徒の興味、関心のあるテーマによる選択クラス展開	
総授業時間数	1120	32		1050	30		1050	30	

○平成13 (2001) 年度入学 高等学校教育課程

教科	第1学年	第2学年		第3学年	
		共 通	選 択	共 通	選 択
国 語	国語 I 4	現代文 2 古典 I 2	古典講読 2□	現代文 2 古典 I 2	国語表現 2▲ 古典 II 3☆
地 理 歴 史	世界史 A 2	日本史 A 2 地理 A 2 } 2	地理 A 2□	世界史 B 4 日本史 B 4 地理 B 4 } 4	世界史 B 2 日本史 B 2 } 2△ 地理 B 2 現代社会 2
公 民	現代社会 1	現代社会 2		倫理・政経 4	
数 学	数学 I 4 数学 A 1	数学 II 3 数学 A 1	数学 B 2★		数学 III 3☆ 数学 A 2◇■ 数学 B 2 } 2▲ 数学 C 2
理 科	化学 I A・生物 I A 3	物理 I B 2 化学 I B 2 生物 I B 2 } 2 地学 I B 2	物理 I B 2 化学 I B 2 } 2□ 生物 I B 2 地学 I B 2	物理 I B 2 化学 I B 2 } 2 生物 I B 2 地学 I B 2	物理 II 2 化学 II 2 } 2△ 生物 II 2 地学 II 2 物理 I B 研究 2 化学 I B 研究 2 } 2■ 生物 I B 研究 2 地学 I B 研究 2
保 健 体 育	体育 3 保健 2	体育 2		体育 2	スポーツ理論 3☆
芸 術	音楽 I 2 美術 I 2 } 2 書道 I 2		音楽 II 2 美術 II 2 } 2★		音楽 II 2 美術 II 2 } 2◇ 音楽 III 2 美術 III 2
英 語	英語 I 4 オーラル I 1	英語 II 4 オーラル II 1	総合英語 I-1 2□ 総合英語 I-2 2★	英語 II 1 リーディング 4	総合英語 II-1 2◇ 総合英語 II-2 2■ 総合英語 II-3 2△ 総合英語 II-4 2▲
家 庭	家庭一般 2	家庭一般 2	生活と技術 2★		家庭一般 2▲
総合 人間科	(総合人間科) 生命と環境 II 1	(総合人間科) 平和と国際理解 II 1		(総合人間科) 生き方を探る II 1	
新教科 科 群	(新教科群) 1 心と身体の科学 0.5 自然と科学 0.5 国際コミュニケーション学 0.5 共生と平和の科学 0.5	(新教科群) 1 心と身体の科学 0.5 自然と科学 0.5 国際コミュニケーション学 0.5 共生と平和の科学 0.5	※新教科群は半期 ずつ1～2年で4 分野を履修(学年 1単位)		※選択科目の選び方は、同一学年の同 じマークの複数教科から1科目選択す る。
ヒューマン プログラム	ソーシャルライフ (1) (保健体育の中で) ホームルーム 1	ホームルーム 1		ホームルーム 1	
計	32	26	4	19	11
総計	32	30		30	

1. 青年期の「キャリア形成」を中心として

(2)「キャリア形成」における学年課題と年間指導計画

はじめにーキャリア教育とは

本校の研究会議でも、教育学部の金井先生（7月13日実施）、寺田先生（12月6日実施）に「キャリア教育」についてお話をしていただいた。二度の研究会議によりキャリアについての理解も深まったが、もう一度、キャリア教育・キャリア形成について整理してみる。

本格的に「キャリア教育」が登場するのは、「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」＝中央教育審議会答申（1999年12月）からである。この答申の中では、「学校と社会及び学校間の円滑な接続をはかるためのキャリア教育（望ましい職業観・勤労観及び職業に関する知識や技能を身につけさせるとともに、自己の個性を理解し、主体的に進路を

選択する能力・態度を育てる教育）を小学校段階から発達段階に応じて実施する必要がある。」と述べられている。さらに、「キャリア教育の実施に当たっては家庭・地域と連携し、体験的な学習を重視するとともに、各学校ごとに目標を設定し、教育課程に位置づけて計画的に行う必要がある。また、その実施状況や成果について絶えず評価を行うことが重要である（同上）」。

このように、キャリア教育の定義としては「望ましい職業観・勤労観及び職業に関する知識や技能を身につけさせるとともに、自己の個性を理解し、主体的に進路を選択する能力・態度を育てる教育」であり、単なる受験指導や就職指導を意味するものではない。この点をおさえて、本校独自の「キャリア形成」を目指したカリキュラムを開発していく必要がある。

学年	総合人間科のテーマと授業内容	教科との関連	教務部	進路部
中学一年	生き方を探るⅠ 身近な人へのインタビュー 働く人へのフィールドワーク		オリエンテーション	
中学二年	生命と環境Ⅰ フィールドワーク			
中学三年	平和を考えるⅠ 広島修学旅行			実力テスト
高校一年	生命と環境Ⅱ 個人研究 フィールドワーク		オリエンテーション 科目選択	進路適性検査
高校二年	平和を考えるⅡ グループ研究 沖縄研究旅行		科目選択	進路希望調査 1月実力テスト
高校三年	生き方を探るⅡ 生き方アンケート 系統別グループ フィールドワーク 学外講師 スピーチ 全体スピーチ 報告書			進路希望調査 5月実力テスト 9月実力テスト 11月実力テスト 12月進路検討会議

①本校の「総合人間科」を中心とした「キャリア形成」と教科・校務分掌との関係

キャリア教育は、学校の全教育活動の中で行われることが望ましいが、本校の「総合人間科」の授業を中心として、教科や分掌との関連でキャリア教育をとらえなおしてみよう。ただし、教科との関連は今年度では分析が不十分なので次年度以降の課題である。

「総合人間科」は、「生きる力を自覚的に選択できる力」を育てることを目的としているので、「キャリア教育」を行う上での中心となる教科と考えられる。また、分掌としては、日常的に教科業務一般を行っている教務部や直接進路にかかわっている進路部を取り上げながら、今後の「キャリア教育」のあり方を考えてみる。

表からも分かるように、今後の課題としては、中

学校分野の進路部の取り組みをどうするか、キャリア形成の観点から見直してみる必要がある。

身体の問題を総合的にとらえ自ら生きる力を選択する能力であると考えられる。こうした「生きる力」を各学年段階でどのように形成するが、本校の中等学校設立計画書から見ると、以下のようになる。

②従来の学年課題と次年度の構造化の試案

生きる力の確立。「生きる力」とは、生き方、心、

学年	生きる力 (生き方、心、身体) からとらえた学習構造
中学一年	「生き方を探る」 人間関係の基礎基本を確立する—ソーシャルライフ (ライフスキル) 身近な出会いのフィールドワーク
中学二年	「生き方に学ぶ」 人間関係の充実
中学三年	共生、異質な他者を理解する インターンシップⅠ
高校一年	「生き方を総合する」 コミュニケーション能力の社会化
高校二年	インターンシップⅡ
高校三年	「生き方を選択する」 生き方とつなぐフィールドワークの実施

これらの学年構造を「キャリア教育」の観点から、各学年の構造化を本校の1-2-2-1制との関連からもう一度整理し、学年課題を設定し中高一貫の

カリキュラムとの関連をまとめてみたのが次の表である。

	区分	学年	キャリア教育の学年目標	中高一貫カリキュラム
中学校	入門基礎期	中学一年	自己・他者認識の基礎を学ぶ	ソーシャルライフ
	個性探求期	中学二年	社会との結びつきを認識を高める	選択プロジェクト
		中学三年	社会のシステムを理解する キャリア情報検索能力	
高等学校	専門基礎期	高校一年	自己理解の深化	新教科群
		高校二年	社会理解の広がりをめざす キャリアプランニング能力	
	個性伸張期	高校三年	自己実現	大学との連携

中学校では、自己認識や他者との関係を学ぶことを重点に、社会の基本的なシステムにもついて学ぶことに重点を置いている。また、教科の中にも「キャリア教育」を位置づけ、カリキュラムを検討する必要もある。さらに、中学三年生の学年課題と併せて情報検索能力 (コンピュータ・リテラシー) についても学ぶことが重要である。

高等学校では、自己理解をさらに深めて自己の適性について考えさせると同時に、自分の将来設計=キャリアプランニング能力も高めていく必要がある。最終的には、高校三年生の段階で全ての生徒が、自らの生き方を選択でき、自己実現が可能な能力を

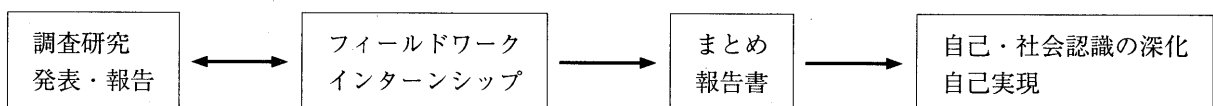
身に付けることができるよう計画を立てることが望ましい。

これらの学年課題と「総合人間科」や中高一貫カリキュラムが無理なく展開できる学年計画・年間計画を確立させることが次年度の課題となる。

③年間指導計画

年間指導計画は、各学年のフィールドワークや修学旅行・研究旅行、学校行事を軸として、教務部・進路部と連携をとりなが、学級活動・教科の授業・「総合人間科」などの授業の中で有機的に機能するものが望ましい。

一年間の学習の流れ



## 1. 青年期の「キャリア形成」を中心として

### まとめ—今後の課題

雇用形態の変化—終身雇用制の崩壊や社会の変化—「フリーターの志向」の増加などから「キャリア教育」が求められていると考えられる。こうした変化に対応することも必要であるが、基本的には本校の「総合人間科」が目指している「自らの進路を自覚的に選択できる力」を原点として、学校の基本システムである校務分掌や教科の授業からもキャリア教育に取り組むことが大切であると考えられる。

(山田 孝)

### (3)「心と身体の教育」としてのソーシャルライフの授業展開の試み

#### ①中学1年生 ソーシャルライフ

##### ア 研究設定の理由

本校の研究開発の大きな柱の一つである青年期の「キャリア形成」の中には、「心と身体の教育」が位置づけられている。これは、中高一貫カリキュラムの中に、「自分のことをよく知り、自分の将来を主体的に探り、実現していこうとする態度」を身に付ける教育を実現するにあたり、自分の心と体の健康や自分の考え方、集団や社会との関わり方についてを学習する機会を設ける必要性から、名古屋大学教育学部教授の吉田俊和先生に相談し、この授業を設定することになった。

最近の社会問題の中には、残念であるが、中学生や高校生が取り上げられることが多くなってきた。電車の中で通路に座り込む高校生や「きれる」「いじめ」というような問題から殺人まで様々なものが出てきている。こうした問題は、自分と社会の結びつきを意識する経験が少なかったり、他人とのコミュニケーションが下手だったりすることと関係がある。

自分と社会の結びつきは、自分とはあまり関係のない人からの指摘を受け入れることから意識される。昔は地域社会でこのようなことが自然になされていたのだが、地域の教育力が低下した現代においては、代わりとなる場が求められている。校内においても、友だちとのちょっとしたトラブルを乗り越えることができずに欠席してしまうようなこともある。対人関係や社会集団との関わりについての教育の場は、学校でも必要とされている。

ソーシャルライフは、学校の中で、ものや人の見方、考え方を体験的に感じ、考える場を提供するという主旨で設定することになった。

##### イ 研究の目的

若い世代の人に対する働きかけとして、学校教育の中で種々の体験的学習をさせることによって、自

分と級友・クラス・学校・社会のと繋がりに気付かせる。そして、自分の行為が周りの人間にどのような影響を及ぼすのかを理解させ、社会志向性を高めるような授業プログラムの開発を目指す。それぞれの授業の目的は、「人間や社会を考えるのに必要な視点を体験的に提供する」ことで、「人の行動のしくみ」、「対人関係」、「集団・社会」における知識やルールを教えることにより、社会的コンピテンス(EQ:自分を周りの中においてみて何が必要かを考える能力)(対人関係能力、集団や社会への自立適応能力)を高めることを目標とする。教育心理学や社会心理学の知見をベースにした体験的学習により、自分と他者、自分と集団・社会との関わり、集団内のトラブルにどう対処していくのか、を考えさせる人間教育を目指す授業を考えていく。

##### ウ 授業について

研究スタッフは、名古屋大学教育学部教授の吉田俊和先生を中心に、三重大学教育学部の廣岡先生、愛知淑徳大学コミュニケーション学部の斉藤先生、愛知教育大学の石田先生と3名の博士後期課程の院生および本校中学1年生担任団である。授業案は大学側で提案し、事前打ち合わせを担任団と行って実施可能かどうかを検討してから実施する。授業は、土曜3・4時間目の110分で、50分刻みを意識しないで、一区切りつけたところで休憩をはさむ形を取っている。授業を行うのは院生で、サポートに担任団が、補助者に大学の先生が関わっている。土曜の3・4時間目は、他学年が総合人間科の授業を行っているが、大学の先生の都合でここで行っている。

##### エ 指導経過

###### 第1回 記者会見ゲーム 4月10日

この授業では各生徒が自己紹介を型通りにするのではなく、ゲームを通じて他者に対するポジティブな情報を入手する機会を提供し、クラス内での友だち関係の形成を促す。また、記者役の生徒達はターゲット(会見役)に対する印象を評定しておき、9月に予定されている「他人を知る＝ステレオタイプの理解」という授業の題材とする。

自分の名前と出身小学校、特技などを自己紹介し、その他の生徒に、自己紹介をした生徒のよい面を答えられるような質問をさせる。その時点でのそれぞれの生徒に対する印象を評定させる。

###### 第2回 記憶の不確かさ 5月6日

この授業のねらいは、「記憶の不確かさ」や「記憶のあいまいさ」を体験を通して理解させることである。視覚刺激や聴覚刺激から、体験を通じて、記憶し、思い出すときに犯しやすい誤りについて理解を



深める。消えた補助者の記憶をたどることから、目撃者証言の不確かさを知ったり、伝言ゲームで情報伝達のあいまいさや犯しやすい誤りを確認し、うわさやデマの問題を明らかにする。

第3回 物の見方と見え方 5月20日

この授業では、「物を見る」ということに着目し、実際とは異なって見えてしまうことの不思議や、物の見方、見え方は1つだけではないことを体験から気づかせる。同じ物でも、見方を変えれば、異なって見えることに気づいてもらい、次回以降の「人を見る」場合にも、見方は一つではないことに結びつける。

- \* 硬貨の大きさや模様確認→前回授業の復習をかねて、日頃頻繁に使用している物であっても記憶はあいまいであることを体験させる。
- \* 錯視図形を用いて、実際はそうではないのに、そう見えてしまうこと不思議を体験させる。
- \* だまし絵を用いて一つの物でもいくつかの見え方があるという不思議を体験させる。
- \* 前後の文字によって影響がある体験をさせる。→ 12、13、14・A、B、C
- \* 「女の子が箱を持ち上げている（降ろしている）絵」をみせて、両方の見方ができることを理解させる。

第4回 人の行動の見方と見え方 6月3日

この授業のねらいは、前回から引き続いて、「物の見方や見え方」が一つではないことの延長として、「人の行動の見方や見え方」もいろいろ考えられることを体験させる。

- \* 4コマ漫画をばらばらにして（2枚の順序は固定）、自由にストーリーを組み立てさせ、いろいろな順序で、様々なストーリーができることを体験させる。
- \* 1枚の場面を見たときだけに持つ印象が、2枚の場面を見ることによって変わることを体験させる。
- \* 自分が人を見る時も、このようなことがないかを考えさせる。

第5回 情報からの推理 6月17日

この授業は、ある出来事から推測される原因が、手に入る情報によって異なってしまうことを体験させ、正しい判断をするためには、いろいろな角度から情報を入手することの重要性を理解させることである。

- \* 出来事：花子さんは『悲しい物語』を読んで、涙を流していた。

情報系列1 和子さんも『悲しい物語』を読んで、涙を流していた。

良子さんも『悲しい物語』を読んで、涙を流していた。

原因の推測→他の人も涙を流すのなら、その物語は、きっと悲しいに違いない。

情報系列2 花子さんは『感動的な映画』を見ても涙を流していた。

花子さんは、『心温まるドラマ』を見ても涙を流していた。

原因の推測→花子さんは、映画やテレビドラマを見ても涙を流すので、きっと涙もろい性格なのだろう。

\* 単なる1つのうわさだけで、人を判断していないかについて考えてみる。

第6回 モラルジレンマに対する話し合い 7月1日

この授業の目的は、様々な考え方をを持った人との話し合いを経験することにより、これまで習得した「人間・社会を多様な観点から考える能力」を応用する力を養う。また、多様な考えを持つ人と共に話し合うことの大切さを知ること、目的とする。

サッカーが得意な子がクラス対抗ゲームの直前に隣の親友にサッカーを教えてと頼まれたときに、自分ならどうするかを理由を含めて考えるというのが課題である。生徒はまず自分で考え、次に班で話し合っ一つの意見と理由をまとめ、クラス全体に発表し合うという内容である。生徒は、理由の説得力がない意見が否定されるとともに、他人の考えの多様性に触れ、自分の考え方の幅を広げることにつながった。

第7回 人を知る

9月2日 (A組) 12月16日 (B組)

頼み方

12月16日 (A組) 9月2日 (B組)

ここからの授業は3回1セットのものをA・B各組で順番を変えて行うことにした。(11月18日を除く) これは、

1 まず人を知るにあたって注意しなければならないことを体験的に学習してから実際に人と接する「スキル」を学ぶ。

2 実際に人と接する「スキル」を学んでから、人を知るにあたって注意しなければならないことを体験的に学ぶ。

の、どちらが生徒にとって有効かを考えるために、A・B組で比べることになったためである。

A組：この授業の目標は「人を知る」ということである。1学期の最初の授業で、初対面のクラスメイトによいところを聞き出すことを目標にインタビューをして、その人の印象を記述した。この授業

## 1. 青年期の「キャリア形成」を中心として

はその続きである。

グループに分かれて友だちに対して記者会見ゲームをする。記者会見をされる前に、みんなに知ってもらいたい自分のよいところで、まだあまり知られていないことを、それぞれが書いておくようにする。記者会見ゲームを行って、会見をした記者はそれぞれ新しく発見をしたよいところを書き、会見をされたものは、自分が言いたかったことを言うことができたかをチェックする。このゲームから、自分の言いたいことと人に聞かれることにはずれがあるということや、友だちにはまだ知らないよい点があるということ、人のことを一部の情報から判断していること、そして、人を理解することは難しく誤解などが起こりやすいということ等を確認する。

B組：この授業の目的は、頼みたいことを具体化させる重要性を体験的に気づいてもらい、スキル習得に向けての教育を行う。「このプリンター、とても重いんだ。」というせりふを言っている絵と、「このプリンターとても重いんだ。運ぶのを手伝ってくれると助かるのだけれど。」というせりふを言っている絵を生徒に見せ、どちらが頼み事を手伝おうと思うかを考えさせる。そこから、頼み事のルールについて考え、「頼み事をしなければならない理由」と「具体的な要求」が大切であることを実感させる。次に、自分たちで実際に人に頼み事をして、頼み事がかなえられたときに重要なこと（お礼を言うことなど）も体験させる。

### 第8回 印象形成

10月7日（A組） 2月3日（B組）

断り方

2月3日（A組） 10月7日（B組）

A組：この授業の目的は、偏った情報から偏った印象を形成する可能性があることを、体験を通して知ってもらうことである。人に関わるすべての情報を手に入れることは難しく、また、印象というものには正解がない。そのような状況でどういったことに注意すればよいかを考えることも目標としている。

まず最初に、K君という人について1つの情報を流す。その情報だけで、K君がどのような人であるかという印象を確認する。次にもう2つ、K君についての情報を流し、その時点でのK君についての印象を確認する。最後に、K君とは漫画「サザエさん」に出てくるカツオ君であることを紹介し、自分の今までの印象を比べ、その変化の理由について考える。生徒にはそれぞれ違う情報が1つずつ流されるので、最初に印象を発表するときは、ばらばらの印象になるが、K君がカツオ君であることがわかる

と、印象がそろうということを体験させる。

B組：この授業は、「断り方のスキル」について、断るときは主体的に断ることの重要性を体験的に気づかせることが目標である。断るときに、相手との関係を悪化させない方法を考えさせるものである。

まず最初に、何か頼まれた状況で、「うーん、いいよ。」というあいまいな返事をしている絵を見せ、この断り方の問題点を考えさせる。次に、「何でそんなことしなくちゃいけないんだよ。」といている絵を見せ、この断り方の問題点も考えさせる。そして、どのように断ったらいいかを考えさせ、「謝罪」「断る理由」「断りの表明」「代わりの意見」等を示すことが重要であることを知る。その後、自分で課題を作らせ、断ることを体験させる。

### 第9回 行為者と観察者の考え方の違い

10月21日（A組） 2月17日（B組）

頼む・断るスキルの実践と応用

2月17日（A組） 10月21日（B組）

A組：この授業では、帰属の偏りに影響を与える要因として、「行為者と観察者の帰属過程の違い」に着目する。これは、社会心理学の中でも有名な研究で、他者の行動の原因は本人の性格や態度などの内的な要因に帰属する傾向が強いが、自分の行動はこれと対照的に、外部の環境に原因帰属が行いがちであるとしたものがある。日常場面で、観察者の立場に立っていると、本当は環境や文脈に原因があるのにも関わらず、その行為者の性格などが原因であると思ってしまう、それが友だちに対する誤解を招くこともある。このような場面があったとき、本授業の成果が見られることを期待するものである。

最初に、運動会のリレーで負けた人（教師）へのインタビューとして、グラウンドの状態や一緒に走った競争相手により仕方なく負けたという様子を見せる。その後、なぜその人がリレーで負けたか、原因を考えさせる。そして、実際にその人（教師）にインタビューし、負けた原因は本当にグラウンドの調子や相手が悪かったからだということに答える。次に2種類の紙を好きな方を選ぶ形で生徒に配る。1種類目の紙には自分のこととして理由を考える質問が書いてあり、2種類目は他人のことについての理由を考える質問が書いてある。それぞれの理由を挙手で答えさせ、数を数える。そして、1種類目の質問の答えが自分以外の理由を答えとした生徒が多いこと、2種類目の質問の答えが当事者のことが理由とした答えをした生徒が多いことを証明する。このことから、自分のことは、自分以外のことに原因があると答えがちで、他人のことは、その本人が原因であると答えがちであるということを実感させる。そ

の後そのような状況を4コマ漫画に書き表させるというものである。

B組：この授業では、頼む・断るスキルの実践と応用を行う。また、スキルの発揮が困難な場面を経験し、他者の気持ちや状況を理解することに重要性や難しさにも気づかせる。目上の人や同学年の人への言葉遣いについても考えさせる。

教室に8カ所のポイントを設けて、生徒はスキルを発揮してポイントを通過する。ポイントの4カ所は頼み事をして、残りの4カ所は断ることをする。しかし、ポイントの一部は素直に通れない。(困難な状況として、頼むとうやむやに断られ、断ると強引に頼まれるようにする事になっている) 2人1組になってポイントを回りうまくいかなかった状況があったことを確認する。その時にどのような気持ちになったかを発表し合い、次に相手の状況や気持ちについても考えさせる。その時の重要なこととして、「表出やせりふからどんな気分かを考えることは重要だが、それがすべてではないので、前後の文脈や流れも合わせて考えなければならない」ということ、「相手の状況や気持ちを考えるのは難しいことである」ということを確認する。そして、頼んだり断ったりするとき大切なのは、前後の文脈もよく考えて、相手の気持ちや立場を察すること、頼むときや断るときにはあいまいなことをすると相手も困ってしまうことをおさえる。

第10回 モラルジレンマに対する話し合い 2 11月18日 (A B同授業)

この授業は7月1日に行ったものと目的は同じである。何度も経験することにより、考えの幅を広げる機会が増えより柔軟な考えができるようになることを期待するものである。また、10月21日にB組に行ったソーシャルスキルトレーニングの討議場面への効果について、評価することも目的である。

まず最初に、息子が大げがをした人が医者に子供を運ぶために近くにいた人に車を貸してくれるように頼んだが、断られたためにその人を殴って車を奪い、子供を医者に運んだが、警察に捕まってしまったという話をする。生徒は捕まった人がしたことを悪いと思うかどうかを理由を含めて考える。その後、グループで討議して一つの結論をまとめ、発表し合う。次に友だちと映画を見る約束をしていたが一方が電車の故障で待ち合わせに遅れてしまい、映画館に列んでいた友だちに対して後れてきた子を入れてあげるかどうかを考えさせた。最初と同様に自分で考え、次にグループで話し合い、発表するというかたちをとった。ジレンマの内容は、日常ではあまり起こりそうにないものから、身近に起こりがち

な内容へということで、この2つ用意をした。その後、話し合いの様子を確認し、同じ場面でも多様な解決策が存在することと、自分の考えと異なる人とも、円滑に話し合いをすることの大切さをおさえた。また、自分の考えが、話し合いによって、より説得力のある意見へと変化させることも大切であることを合わせて確認した。自分の意見をときには折れて、妥協点を見いだすことの大切さも体験した。

ここから以後3回は、今までの授業をA組B組それぞれ逆転して行ったので、内容は省略する。

第11回 頼み方

12月16日 (A組) 9月2日 (B組)

人を知る

9月2日 (A組) 12月16日 (B組)

第12回 断り方

2月3日 (A組) 10月7日 (B組)

印象形成

10月7日 (A組) 2月3日 (B組)

第13回 頼む・断るスキルの実践と応用

2月17日 (A組) 10月21日 (B組)

行為者と観察者の考え方の違い

10月21日 (A組) 2月17日 (B組)

第14回 まとめ (最終回) 3月3日 (A B同授業)

オ 研究の成果と今後の課題

a 授業を行ってきた感想 (担任団の話し合いより)

- ・担任が直接授業をするのではなく、客観的に授業を通して生徒と関わることができるので、じっくりと生徒を観察することができ、担任が生徒の内面を深く知ることができるのはよい。
  - ・授業が先生主導型で行われているのだが、体験重視であるのならば、もう少し生徒が自由に体験する中で課題を感じるような形で、授業を行っても良いのではないかと。
  - ・生徒の中では、授業はおおむね好評であるが、中には考えることが多いのでつまらないという生徒もいる。
  - ・院生や他大学の先生が、とてもうまく授業をしてくださっている。しかし、生徒の反応を見て、もうこの過程はいらぬと思われることなどを臨機応変に対処することはできないので、多少の多少しさを感じることもある。しかし、高大の連携という観点からも現在の授業形態がベストといえる。
- b ソーシャルライフと生徒指導
- ・担任としての立場ではある方向性を持って生徒指導をしている。(例えば、このことについてはこうしなさいとか、こうしては行けないとか、こうし

## 1. 青年期の「キャリア形成」を中心として

たらどうか)しかし、ソーシャルライフで今現在教えていることは「他にも考え方があるのでは」ということである。もし担任が指導をしたとき、生徒からそのようなことを言われたら、どのように対処すべきなのかを考えておかななくてはならない。

- ・吉田先生いわく、完全に正しい答えはないことが多い。したがって、対立する意見の中での解決策は、いかに両者が譲りあって納得するかということだ。多くのものが納得するような策が解決策となる、とのことである。この考え方は、生徒指導にもいえることのように思う。
- ・生徒同士のトラブルを解決する際にソーシャルライフでやったことを引き合いに出して助言することもできる。
- ・ソーシャルライフの主な目的は、「社会生活へ自立的に適応できるスキルの習得を目指す」である。いじめ問題や、生徒自身のあり方について考えるというものではないので、その点においてはやはり今までと同じように生徒指導を継続的にする必要があるのである。(今村敦司)

### ②高校1年生ソーシャルライフ

#### ア 概要

ソーシャルライフは、カリキュラムの中では、ヒューマンプログラムの中に含まれる。心の教育はソーシャルライフだけでなく学級活動も含めた時間の中で取り扱うことを意味している。

ヒューマンプログラムの目標は、学校という小さな社会、または一般的な大きな社会の中での自分の存在を意識し、自分の模索をして、対人関係に関する社会的能力の系統的な育成を目指すことである。

生徒に対して新しい仲間と心を開いて、思いやりある開かれた対人関係ができるようにするのが第1段階でのプログラムである。

第2段階は、多くの馴れ親しんだ仲間の中に、新しい別の価値観を持った個性を迎え、その新しい仲間と如何に共生していくかが課題となる。

この時期は、心・からだ共に大きく変化する思春期、青年期のまっただ中であり、附属中学校以外の出身者にとっては、受験を体験せず、伸び伸びと生活してきた附属中学校出身の生徒と交わることによって、一種のカルチャーショックを受ける。

当然心のケアが必要となる。心とからだを育てるプログラムが必要となる。

#### イ 運用について

- ・人間として社会(集団)の中での『気づき』を育てる

自分の存在に対する『気づき』

他者に対する『気づき』

集団としての『気づき』

#### ・構成的グループエンカウンターの利用

子ども達が『気づき』を通して感情を表出し、考えを深め、行動を変化させる。集団の中での居場所を見つけ、相手を受け入れ、自己主張しながら交流のある豊かな人間関係をつくっていきけるための手掛かりとしてグループエンカウンターを利用する。

「エンカウンター」とはホンネとホンネの交流や感情交流ができるような密接な人間関係(体験)である。このような仲間集団を形成できるよう、学級、学年での活動に利用する。

#### ・「体ほぐし運動」の利用

運動遊びは全心身的行動である。頭と手足、感性与理性、思考と行動の統合が求められる。子どもは、運動遊びの中で、自分や仲間の体に気づき、体を動かすことの心地よさや体の痛みを感じる。仲間との協力や対立を経験する。成功や失敗を経験する。このように心とからだを一体としてとらえる観点から「体ほぐし」の考え方が学習内容として取り入れられている。

体ほぐしの運動内容は、【体に気づき】【体の調整】【仲間との交流】である。

a 体への気づきとは、自分や仲間の体の状態に気づき、体を動かす楽しさや心地よさそのものをじっくりと体験することができるようにする。

b 体の調整とは、手軽な運動や律動的な運動を通して日常生活での身のこなしや体の調子を整えることができるようにするとともに、精神的なストレスが解消できるようにする。

c 仲間との交流とは、運動を通して仲間と豊かにかかわる楽しさを体験し、互いの良さを認め合う事ができるようにする。

構成的グループエンカウンターと「体ほぐしの運動」の内容を学年同時展開の体育の授業で年間10時間程度実施する。特に4月から5月にかけて学級活動と仲間作りの観点から有効に利用できる。(中村明彦)